

日本版 NCAA 創設委託事業 実施報告書

学校法人 法政大学

2019 年 3 月

目次	P2
事業実施概要	P3
1. 学生アスリートのキャリア形成支援の強化	P4
2. スポーツ科学の知見を導入した大学スポーツの強化	P9
3. スポーツによる地域連携強化	P16
4. 社会人向け履修証明プログラム「健康とスポーツ」の開設	P20
5. 多摩トレーニング施設を利用した学生スポーツ環境の整備	P24
総評	P28

事業実施概要

事業の実施概要は以下の通りである。各取組の詳細については次ページ以降に記載する。

事業名	総合大学における学生アスリートのキャリア形成支援，スポーツと社会の融合ー学部横断型学生アスリート共通教育課程の展開とスポーツ科学研究の実践的な応用ー	
事業の目的	<p>大きく分けて2つの実施目的がある。</p> <p>1つ目の目的は，単に学生アスリートの競技実績の高さに注目するのではなく，学生アスリート自身が，所属学部において確実に専門性を身につけること。加えて，スポーツ科学と健康科学に関する知識を蓄積すること。これらを通して，コーチング，健康づくり，生命科学，福祉，ボランティアといった，スポーツに関連する多様な分野で幅広く活躍するためのキャリア形成支援を行うものである。</p> <p>2つ目の目的は，大学の持つスポーツ・リソースを，学生アスリートの参加を通して社会に還元し，大学と社会の連携強化を実現しようというものである。この目的は2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックのムーブメント向上にも貢献するものである。</p>	
事業実施期間	2018年10月1日～2019年3月29日	
事業内容	取組 1	
	名称	学生アスリートのキャリア形成支援の強化
	目的	S S I が開設するカリキュラムを活用して，学生アスリートのキャリア形成支援を強化し，卒業後社会の様々な課題とスポーツ科学・健康科学とが接合する分野で活躍ができる学生を育成する。
	取組 2	
	名称	スポーツ科学の知見を導入した大学スポーツの強化
	目的	最先端の研究に従事している本学スポーツ科学の研究者と，運動部各部の指導者たちとの協働による競技力向上を目指す。
	取組 3	
	名称	スポーツによる地域連携強化
	目的	スポーツによる地域連携・社会貢献について，保健体育センターとスポーツ研究センターの連携のもと，3キャンパスにおける地域連携事業を従来以上に拡大していく。
	取組 4	
	名称	社会人向け履修証明プログラム「健康とスポーツ」の開設
	目的	人生100年構想，生涯スポーツが謳われるなかで，社会人とりわけシニア層に対して，大学が持つスポーツ・健康に関わるリソースを還元していく。
	取組 5	
名称	多摩トレーニング施設を利用した学生スポーツ環境の整備	
目的	従来は競技団体ごとの取り組みに委ねてきた部分が多々あった安全・健康面について大学のスポーツ資源を活用し，質の高いスポーツ人材の育成，学生のスポーツ環境の整備を図っていく。	

1. 学生アスリートのキャリア形成支援の強化

1-1 事業概要

本学では、スポーツに優れた者の特別推薦入学試験による入学者を対象とした、SS I（スポーツ・サイエンス・インスティテュート）というアスリート向け教育プログラムを設置している。同プログラムでは約 800 人の学生アスリートたちが学んでいる。学生たちは、それぞれが所属する学部で基礎（教養）科目・専門科目を学びながら、SS I 科目を履修し、所属学部の専門能力×アスリートとしての専門能力を同時並行的に磨いている。これにより教養ある大学生アスリートおよび良識ある指導者（グッドコーチ）の育成が可能となっている。本事業では学生アスリートのキャリア形成支援施策として同プログラムの改良を行った。

1-2 改良の方針について

プログラム内容の改良については、新たに次のような教育課程編成・実施の方針を定めた。

- 1) スポーツ科学の基礎的な科目を設置して、科学的なトレーニングとコーチングを実践するための基礎的な能力を身につける。（SS I 基礎科目・SS I 主催）
- 2) スポーツ科学の専門的知識を学ぶ科目を設置し、自らのハイパフォーマンスを実現する能力と、自らが指導者になった時にハイパフォーマンスを実現させるためのコーチングを行う能力を獲得できるようにする。（SS I 専門科目・SS I 主催）
- 3) スポーツ科学と融合させることができる学際科目（キーワードとして、文化、健康、生涯学習、地域、ボランティア、持続可能性など）を充実させ、スポーツ科学をより幅広く発展させる能力を養う。（SS I 専門科目・学部主催）

SS I では、多様な学部にも所属する教員が協同することにより、学部相互の特色を併せもった教育課程を編成する。そして、競技力の高い学生の全人的な成長を促し、文武両道にとどまらず、スポーツの文化的価値を発信できる人材を育成する。

最終的に、競技力の高い学生の充実したデュアルキャリア（人生というキャリアにアスリートキャリアという軸を追加した状態）とセカンドキャリアの実現に貢献することを目指す。

1-3 カリキュラム・ツリーの刷新について

前述の方針に従いSS I に設置している科目を「スポーツ科学系」、「健康科学系」、「スポーツキャリア系」の3分野に分類した。科目名称等の詳細は以下のとおりである。

1) 【スポーツ科学系 28 科目】

「リーダーシップ論Ⅰ」「リーダーシップ論Ⅱ」「スポーツ文化論」「スポーツと法Ⅰ」「スポーツと法Ⅱ」「トップアスリート論」「スポーツメディア論」「スポーツ社会学」「スポーツ振興論」「スポール組織論」「スポーツ実習Ⅰ」「スポーツ実習Ⅱ」「オリンピック・パラリンピックを考える」「スポーツ学入門」「スポーツ経営論」「スポ

ーツ心理学」「アスリート育成指導法」「スポーツ指導論」「トレーニング科学」「身体運動学演習」「スポーツ方法論」「トレーニング理論と実践」「スポーツ情報戦略論」「スポーツビジネス論Ⅰ」「スポーツビジネス論Ⅱ」「スポーツ産業論」「スポーツマーケティング論」「スポーツメンタルトレーニング論」

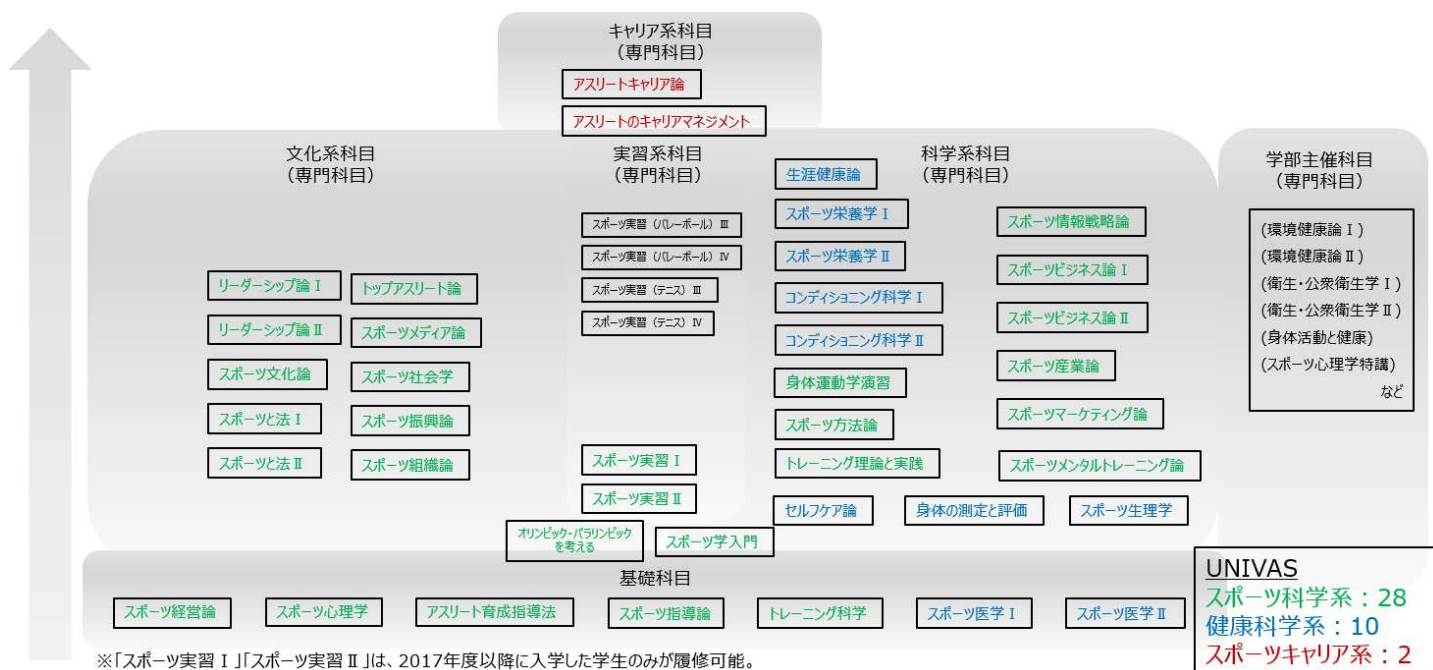
2) 【健康科学系 10 科目】

「生涯健康論」「スポーツ栄養学Ⅰ」「スポーツ栄養学Ⅱ」「コンディショニング科学Ⅰ」「コンディショニング科学Ⅱ」「セルフケア論」「身体の測定と評価」「スポーツ生理学」「スポーツ医学Ⅰ」「スポーツ医学Ⅱ」

3) 【スポーツキャリア系 2 科目】

「アスリートキャリア論」「アスリートのキャリアマネジメント」

また分類に合わせて S S I のカリキュラム・ツリーの刷新も以下の通り実施した。



以上の科目を各部の活動（練習）時間帯や週末の試合日（会場への移動日含む）を考慮し，原則月曜日から木曜日までの1時限目から3時限目に配置した。

1-4 具体的な科目について

科目の詳しい内容をイメージするため、「スポーツ科学系」，「健康科学系」，「スポーツキャリア系」の3分野から1科目ずつ例をあげて紹介する。

1) スポーツ心理学 (スポーツ科学系)

【授業の概要と目的 (何を学ぶか) / Outline and objectives】

運動・スポーツと心との関係を学ぶ。

【到達目標 / Goal】

発育ステージに応じたプログラムづくり, スポーツと個人要因・環境要因, スポーツへの動機づけやコーチングの評価, メンタルトレーニング, チームマネジメントなどについて理解し, スポーツ場面での実践に活かせるようになることを目指す。

なおこの授業は, 文部科学省が育成を推進している「就業力」の構成要素である「情報収集・分析・発信力 (主に, 情報源把握力, 信頼関係構築力)」と「状況判断・行動力 (主に, 自己変革力, 環境変革力)」の育成に貢献することを旨とする。

【授業の進め方と方法 / Method(s)】

この授業では, スポーツ心理学の実践的なテーマを学習する。運動・スポーツは, 私たちの心と深い関わりをもっている。運動・スポーツと心との関係を学ぶことは, 効果的に運動・スポーツ指導を実践する上で欠かせない。この講義では, 公認スポーツ指導者養成のための共通科目として, 発育ステージに応じたプログラムづくり, スポーツと個人要因・環境要因, スポーツへの動機づけやコーチングの評価, メンタルトレーニング, チームマネジメントなどについて, 具体的かつ実践的に学び, 実践できるようになることを目指す。

2) スポーツ生理学 (健康科学系)

【授業の概要と目的 (何を学ぶか) / Outline and objectives】

この授業では, スポーツや運動に対する身体の生理的応答および適応を学習することを大きなテーマとする。また, 筋の形態や機能, エネルギー代謝の調節, ホルモン分泌, 神経・呼吸循環調節など, 様々な観点からスポーツ場面における生理的調節機序の基礎を学ぶことを目的とする。

【到達目標 / Goal】

1. スポーツ生理学の基礎的な用語を用いてスポーツ・運動時における身体の応答や適応について説明することができる。
2. 授業を通じて学んだ知識・情報を用いて, 効果の高いスポーツトレーニングや運動を実践することができる。

【授業の進め方と方法 / Method(s)】

本授業の目的を達成するためには, いかにかその課題を解決するかを「考え, 実践すること」が重要となる。最新のトピックスを踏まえた講義を通じ, スポーツ生理学に関連した知識を学ぶことは授業目的の一つであるが, その知識をどのように自らの競技やトレーニングへ活かすかを考えることを重視する。

3) アスリーートのキャリアマネジメント (スポーツキャリア系)

【授業の概要と目的 (何を学ぶか) / Outline and objectives】

アスリーートのキャリアについて考える

【到達目標 / Goal】

アスリーートのキャリアマネジメントについて学ぶことで、以下の2点に到達することを目指す。第一に自分自身のキャリアをマネジメントするために具体的な行動を起こせるようになること、第二に同級生や後輩にキャリアについて助言ができるようになることである。

この授業は、文部科学省が育成を推進している「就業力」の構成要素である「情報収集・分析・発信力 (主に、信頼関係構築力, 対象者確定力, 情報伝達力)」と「状況判断・行動力 (おもに行動力, 説得力, 共同行動力)」の育成に貢献することを目指している。

【授業の進め方と方法 / Method(s)】

この授業は、職業指導 (キャリアガイダンス) の一環として開講され、アスリーートのキャリアマネジメントについて具体的かつ実践的に学ぶ授業である。さらに、授業では「ゲーム」や「グループワーク」を多く取り入れ、受講生が楽しみながら自らのキャリアを具体的に考える機会を設定する。これらの学習を通じて、受講生が社会的・職業的に自立できるようになることを目指している。

学生によっては、卒業後にプロフェッショナルの世界に進んだり、企業チームに所属したりして、競技を続ける者もいるだろう。しかしどの選手にも、いつの日か現役を引退し、次のステップを歩み始める時がやってくるので、その時に勇気を持って自分から一歩前に踏み出せるように準備をしておく必要がある。

なお、同じキャリア関連のSSI科目である「アスリーートキャリア論」と合わせて受講することを推奨する。

1-5 事業まとめ

SSIでは、本学の学生アスリーートとして総合的な知識の修得とともに、文化と科学としてのスポーツの理解を図り、これからのスポーツ文化の担い手を育てている。本プログラムに課題がないわけではないが、現状の課題を的確に把握し自ら評価を行い、資源や制度面での制約がある中で、具体的な改善・対策を計画し、着実に課題に対応してきたという点は学内外で高い評価を得ている。

また、学生アスリーートの育成においては、他大学にはみられない本学ならではの特徴を有する。このコースの強化をしていくことにより、他大学にはない大学アスリーートのキャリア形成の実現が可能となる。アスリーートとしての専門能力×所属学部/部の専門能力を同時並行的に磨くことは、教養ある学生アスリーートおよび良識ある指導者 (グッドコーチ) の育成を可能にするものであると考えている。

2. スポーツ科学の知見を導入した大学スポーツの強化

2-1 事業概要

本事業では、かねてより実施している本学スポーツ研究センターと硬式野球部及び陸上競技部との「法政スポーツ強化プロジェクト」を、他の部への拡大実施するための前段階として、トレーニングセンター学生スタッフの人員強化および他大学の視察を実施した。

2-2 法政スポーツ強化プロジェクトについて

法政スポーツ強化プロジェクトは、2017年5月にスポーツ研究センターに専任研究員を配置してスタートした。専任研究員主導のもと、特に本学野球部においてトレーニングへのスポーツ科学導入を目指した。「コンディショニング指標」「ポジション別特性」を明らかにすることを目的とし、2018年度1年間通じて継続的な体力測定（関節可動域測定、ジャンプパフォーマンスやペダリングパフォーマンスの実施）、血液成分測定、体組成測定を実施した。更に測定の際に得られたデータをもとに、トレーニングメニューの編成を実施した。

また科学的知見の導入とは別に、スポーツ研究センター所員であり、本学文学部においてスポーツ心理学を指導する教授によるメンタルトレーニングや、同じく本学法学部に所属しスポーツ医学を専門とする教授と管理栄養士の共同による食事療法も同時並行的に実施した。

同プロジェクトを実施した結果、野球部は2019年度六大学野球秋季リーグ戦において優勝を納めることに成功している。



2-3 学生スタッフ強化の実施

数多くの体育会が活用する多摩キャンパスのトレーニングセンターに、スポーツ健康学部でコンディショニングを学ぶ学生トレーナーを配置した。これまでは数名の学生がゼミの研究を兼ねて配置されていたが、後述する事業5で雇用したアスレティックトレーナーによる実践的な指示に基づいて、専門的なコンディショニングサポートを実施するようにした。また、これまで法政スポーツ強化プロジェクトの対象であった陸上競技部から範囲を拡大して、今年度は全日本学生選手権で優勝を果たしたサッカー部にも対象を広げた。このように多摩キャンパスで活動する他の部へと、効果を拡大するための取り組みが成果を挙げはじめている。

2-4 海外大学の視察

大学スポーツにおける海外の先進事例として、ミズーリ大学の視察を実施した。同大学は、スポーツ活動に取り組む規模やレベルが大きく、そして充実した施設を持っており、それらの各種取り組みについて意見交換を行った。ミズーリ大学では Executive Associate Athletic Director である Andy Humes 氏に案内などをお願いした。

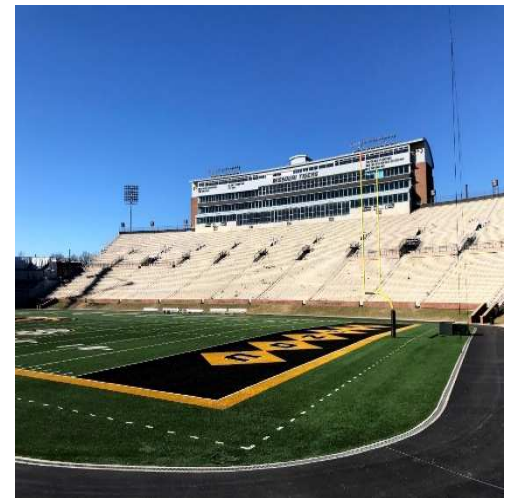


1) ミズーリ大学の体育設備について

今回の訪問において、メインで見学した施設は、ミズーリ大としても伝統もあり、またアメリカ国民全体にも人気の高いアメリカンフットボールとバスケットボールの施設だった。いずれの施設もプロが公式戦で使用するにも十分な機能（数万人の観客席、メイン会場の他、ロッカールーム、トレーニングルーム、サブコート、会議室、電光掲示板、音響施設、（飲食）売店、グッズショップ等）が完備されており、日本の大学における同種の施設に比べてはるかに大規模であった。



またスタジアムの外周は外壁等が無く地域住民に開かれており、気軽に足を運べるようになっていた。さらにスタジアム内にミュージアムが併設されており、単にスポーツ観戦を楽しむだけでなく、大学スポーツの歴史を体感できるコーナーを設け、チームへのファン心理を醸成するような仕組みにも力を入れている様子であった。



その他、野球やソフトボールのスタジアムを見学したが、いずれの施設にもチケット売場が完備されており、数千台を止められる駐車場があった。今回訪問した施設に総じて言えることとして、日本における大学スポーツよりもプロ競技のそれに近いものがあるように感じられた。

またスポーツと直結はしないが、すべての施設がバリアフリー化されており、マイノリティーの人々に対する配慮が施されている点についても、日本の大学として見習うべきところであるように思われた。

2) ミズーリ大学における体育会支援について

① 体育会の状況

ミズーリ大学における体育会（クラブと称している）は全 20 団体である。ただし、この 20 団体は後述するアス

レチックデパートメントが管轄している部であり、その他にも小規模クラブが数多く存在している。学生アスリート数は540人程度で、全学生数2万6千人のわずか2%程度である。多くのアメリカの大学では、入学試験の難易度が、一般の学生に比べてアスリート向けは低く設定されている。ミズーリ大学におけるアスリートの卒業率は91%であるが、実際には他大学に移籍する制度があるため、実際の入学したアスリートがミズーリ大学で卒業する割合は60%程度である。

②学生への支援

ミズーリ大学では大規模な施設を有してはいるが、大学アスリートへの支援はほとんど実施されていない。そのギャップを埋めるための組織として、アスレチック・デパートメントが存在している。

アスレチック・デパートメントは大学の組織であるが、大学とは完全に独立して存在しており、テレビの放映権料で費用を捻出し、所属スタッフへの給与支払いを含め、全て自らの組織内で管理・運営している。特にアスリートの修学支援に強く、アカデミック・コーディネーターという学修支援のセクションがあり、日本の大学の教学部門が行っているレベルで成績チェックや履修のアドバイスなどを行っている。



③クラブへの支援

一方、アスレチック・デパートメントのクラブへの関与は少なく、スポーツ推薦入試の実施や学生への奨学金の付与についても、全てクラブの主導で実施されているとのことだった。数少ないクラブへの関与という点では、学生の行き過ぎたアスリート化を防ぐために、練習時間を週20時間とする規制を設定するほか、コーチへのコンプライアンス・修学についての講座を実施するといった程度であった。

3) ミズーリ大学におけるスポーツ科学研究について

研究協力ミーティングにおいては、Assistant Professor Nutrition&Exercise PhysiologyのJaume Padilla氏との意見効果を行った。ミズーリ大学・本学の研究員の意見は共に、アスリートに対する支援は特にコンディショニングの支援が重要であり、目には見えない部分を定量化して観察する必要があるという点で一致していた。

循環器の観点から考えると、筋力トレーニングは血管機能を一時的に低下させるが、その低下が慢性的に積み重なると動脈硬化症を招くことが分かっている。特にパワー系競技者（陸上の投擲種目やウェイトリフティング、アメリカンフットボールなど）は、持久系競技者と比較して血管硬化度が高いことが判明している。つまりコンディショニングという面ではアスリートの動脈硬化症を予防・改善する方法の確立は急務と言える。

その点でミズーリ大学は動物実験の環境が世界トップレベルで整備されており、実験動物から血管を摘出し、その摘出した血管に対し圧を加えることで、「筋力トレーニング中の血圧上昇」を人工的に再現することができる世界でも数少ない機材を有している。一方でヒトを用いた実験手法については、本学スポーツ研究センターの方が秀でており、ミズーリ大学では出すことができない研究成果を発表できる可能性が高いことが判明した。

お互いの研究において秀でる部分を確認しあい、より発展した研究結果を導き出すために、引き続き議論を重

ね、2019年度から本格的に共同研究の開始を目指していくこととなった。

2-5 国内大学の視察

前述のミズーリ大学の視察に加え、国内における先進事例の視察として、関西大学と立命館大学を訪問した。

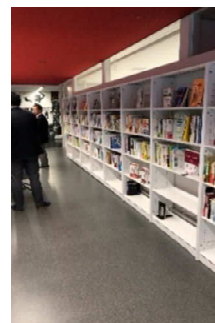
1) 関西大学の体育設備

関西大学の体育施設は主に千里山キャンパスに集中しており、「東体育館」「中央体育館」「中央グラウンド」「凱風館」「新凱風館」「北広場」を体育会向けに利用していた。中でも東体育館は2018年4月に竣工した最新施設であり、体育施設はもちろん防災備蓄倉庫としての機能も兼ねていた。特記すべきことは下記の通り。

①ATルームとパワージム(ウエイトトレーニング施設)は東体育館・凱風館にそれぞれ別施設として設置されていた。ATルームは衛生的に保たれており、マットスペース・施術台・アイスバス・電気治療器が備えられていた。人員としては専属のトレーナーに加えてATルーム学生トレーナー部(体育会学生のコンディン面での支援を目的とした学生団体)がおり、体育会学生を中心にリハビリテーションのサポートを実施していた。一方パワージムではフィジカルトレーニングに必要な各器具が揃っており専属トレーナーとS&Cクラブ(体育会学生のウエイトトレーニングをサポートする学生団体)の学生トレーナーが常駐していた。パワージムは機材の異なる一般学生用のものが中央体育館にも設けられており、体育会学生と被らないように配慮されていた。



②最新設備である東体育館は入口にスポーツに関連する書籍(パフォーマンス向上関係, スポーツビジネス, 就職関連書籍など)が展示されており, 体育会学生が自由に読むことで知識の吸収ができる簡易的な図書館のようになっていた。



③東体育館の入り口にはベルリンオリンピックの陸上日本代表の主将で, 三段跳び選手として活躍した大島鎌吉をはじめとして, 高橋大輔, 織田信成など同大学が誇るオリンピック出場者の足跡が壁一面に記されており, 訪問者に同大学とスポーツとの関わり・歴史が一目でわかるように工夫されていた。



④東体育館の屋内アリーナ, 陸上競技場および屋上テニスコートには観客席が設けられており, 練習試合等を実施する際には観戦することが可能となっていた。

2) 関西大学におけるアスレチック・デパートメントの取り組みについて

①修学支援

体育会学生に対する修学支援については、サッカー部の取り組みを他部へ横展開することを目指しているとのことであった。元々サッカー部では独自に単位基準を設け、単位不良者には出場資格を停止しており、さらに単位不良者を出さないように学生同士で自主勉強会を実施していた。その取り組みを大学が取り上げ、全ての部を横断する勉強会として拡大した。勉強会は参加した各体育会学生が友人・知人から得た情報を発信する場を設けることであり、連携して単位取得を目指すことを目的としているということであった。

このような学生の自発的な修学姿勢を促す仕組みづくりとは別に、大学側でもスポーツ振興グループ（特にスポーツ・アドミニストレーターが中心となって）と学務部が連携し、単位不良の体育会学生のポートフォリオを組み立て、データ分析および面談を通して、綿密な修学サポートを行っていた。

②指導者向け研修

半年に一度程度監督向けに体育会指導者研修会を開催し、ハラスメント講習やS&C（ストレングス&コンディショニング）トレーニングに関する報告を実施している。また参加できない監督は同学の専用サイトにてweb講習を閲覧するように指導していた。

③学生向け研修

2018年度は体育会本部が開催している「リーダーズキャンプ」及び「フレッシュャーズキャンプ」とは別に、大学主催で年間14件の研修を実施していた。1年次向けは2件（コンプライアンス、4年間の過ごし方）、2年次向けは1件（キャリアデザイン）、3年次向けは4件（全て就活講座）、全クラブ向け7件（応急処置講習、ジムオリエンテーション、緊急時連絡講習、熱中症講習、栄養講習、水上安全法救助員I養成講習、緊急法救命手当講習）だった。

④スポンサー契約について

スポンサーとの契約について、関西大学はmizunoと全体契約を結んでいた。契約内容は、mizunoは各部へ物品支給（無償・格安有償を含む）やアスリート研修を行い、その見返りとして大学はmizuno製品の使用を各部に“勧める”形である。契約強度は比較的緩やかであり、部を拘束するものではなく、部の都合でmizunoを使用できない場合であっても全面的に別メーカーを出さなければ使用できるようになっており、一方で個人契約については大学では関与しておらず、個人に任せているとのことであった。

3) 立命館大学の体育設備について

立命館大学の体育施設は本学と同様に各キャンパスに散在しており、今回訪問したびわこ・くさつキャンパスには、BKC 体育館、クインススタジアム（陸上グラウンド）、テニスコート、第1グラウンド、第3グラウンド、BKC スポーツ健康コモンズが設置されていた。

BKC スポーツ健康コモンズは学生・教職員だけでなく近隣住民も利用することのできるスポーツ施設であり、内部にアリーナ、屋内プール（25m）、屋外プール（50m）、トレーニングルーム、アクティブスペース（ヨガ・エアロビなどをするスペース）を備え、定期的な運動プログラムを実施する地域と大学の交流を目的としていた。



4) 立命館大学におけるアスレチック・デパートメントの取り組みについて

本学および関西大学と比較して、足元を固める応援プログラムとして「在学生のスポーツ観戦を促すこと」に特に力を入れており、下記の取り組みを実施していた。

①スポーツ情報の発信

スポーツ強化センターが中心となって、定期的に学内スペースにおいて部員協力のもと競技を紹介するイベントを行っていた。基本的には週1回と決めて実施しており、単発のイベントとして終結させるのではなく、繰り返し実施することで在学生に常にスポーツに関連した行事があるということを意識付けさせるようにしているとのこと。一方で部に対しても研修などを通じて、学内で広く応援されることは結果的に部の強化にもつながることであると理解させ、部の取り組み（ボランティアなども含む）を積極的に情報発信してもらうように呼びかけを行っていた。

②ホームゲームの実施

各部および対戦校の協力のもと、平日の夕方にホームゲームを開催し、観戦までの時間的・距離的な障壁を取り除くことで、在学生の観戦を促す取り組みを実施していた。

2-6 まとめ

本事業で国内外の先進的な取り組みを実施している大学を視察したことで、研究面・施設面・生活面でのアスリート支援についての新しい視点を得ることができた。本学で現在取り組んでいる法政スポーツ強化プロジェクトは、主に研究面に特化して結果を出してきている。しかしプロのアスリートではない学生アスリートとしての性格を今一度見直し、今後は学生アスリートを全方位的に支援していけるよう、本事業で得た情報を参考に学内の体制づくりを進めていく。

3. スポーツによる地域連携強化

3-1 事業概要

本事業では、本学が3キャンパスにおいて実施しているスポーツによる地域連携事業について集約し、新事業の企画・創設を目指した。

3-2 市ヶ谷キャンパスにおける取組

市ヶ谷キャンパスにおいては、かねてより取り組んでいる「東京オリンピック・パラリンピック連携プロジェクト」の新たな施策として、本学OB・OGが数多く日本代表として活躍している体育会フェンシング部の協力のもと、競技デモンストレーションを2018年11月20日に学内正門前広場にて実施した。イベント実施にあたってはフェンシング部のOBであり、公益社団法人日本フェンシング協会の国際審判員である天利 哲也氏が在籍しており、本学と同じ市ヶ谷に本社を構える大日本印刷株式会社と連携することで本学学生に留まらず、市ヶ谷地域に広く発信することを目指した。

イベントは「フェンシングデモンストレーション」「車いすフェンシングデモンストレーション」の2部に分けて実施された。

第1部の「フェンシングデモンストレーション」では、法政大学体育会フェンシング部の現役部員2名が試合を実演し、DNPの天利氏が解説をした。参加した観客からは「フェンシングについては見たことはあったが、選手間の駆け引きなど、表には出てこない選手の思考などの解説を聞いたことで、今後より楽しんで応援していけそうだ」などの意見があがった。

第2部の「車いすフェンシングデモンストレーション」では、本学OBであり東京地下鉄株式会社所属の安 直樹選手を招き、フェンシング部員1名との試合を実施した。第1部同様天利氏による解説を実施、健常者によるフェンシングとの違う部分を強調して説明した。大部分の観客は車いすフェンシングについて初見であったが、健常者フェンシング以上に勝敗が決するスピードが早く、駆け引きが重要になる車いすフェンシングを目の当たりにして非常に驚いた様子であった。

事後、観客に行ったアンケート調査によると「フェンシング」「車いすフェンシング」のどちらにおいても『東京オリンピックにおいて注目していきたい』『法政大学出身の選手を応援したい』との回答が見られ、スポーツにおける地域の活性化を目指そうという本事業の主目的を達することができた。



3-3 小金井キャンパスにおける取組

小金井キャンパスでは、小金井地域で活動する地域スポーツクラブである NPO 法人黄金井倶楽部と長年にわたって共催している地域連携イベントとして、法政大学・黄金井倶楽部交流「卓球大会」、「陸上教室」、「野球教室」を開催した。

実施にあたっては本学スポーツ研究センター委員であり理工学部所属の金光教授、同じく生命科学部所属の越智准教授がアドバイスをしつつ、今回の新イベント創設のために新たに雇用した2名のアドミニストレーター補助が企画・運営を行った。

当日は法政大学小金井キャンパス小体育館で24名の参加を得て、最年少は13歳、最年長は81歳と幅広い年齢層との交流を行った。イベントは「シングルス・ダブルストーナメント戦」「個別指導」の2部門に分けて実施した。個別指導の部門では、本学小金井キャンパスを主拠点として活動している法政大学工体連卓球部の部員4名が指導を行った。これまで実施してきた「野球教室」「陸上教室」とは異なり、卓球の競技特性からか年齢層の高い初参加の方も多く見られた。



また小金井市に選抜された中学生を集めて開催している「陸上教室」「軟式野球教室」も、例年通り実施した。特に陸上教室については箱根駅伝2年連続6位の法政大学体育会陸上競技部駅伝チームメンバーが参加し、ペースやフォームなどの基礎的な指導の実施を行った。本教室で指導した中学生の多くは小金井市チームとして中学生東京駅伝大会に参加しており、そこで男女総合36位の成績を納めている。



新たな人員を配置したことで結果的に参加者層も広がりを見せ、小金井市と本学との連携はますます密になり、事業の主目的を達することができた。小金井市からの期待感が年々大きくなっていることが見られることから、大学として社会貢献の一環として、委託事業終了後もさらなる連携強化を目指していく。

3-4 多摩キャンパスにおける取組

多摩キャンパスにおいては例年同様 NPO 法人 法政クラブと大学が連携し、サッカー・バスケットボール・バドミントン・陸上競技の教室を開催した。本年度はサッカー教室について本学スポーツ研究センターが全面協力、センター委員であり本学スポーツ健康学部の教授である清雲 栄純教授の指導の下で、地域のサッカークラブに所属する小学生の男女が汗を流した。ステップ練習やパス・ドリブル・タッチ・ターンなどの技術指導を実施した。清雲教授は日本代表コーチや J1 チームの監督を務めた経験を持っており、地域のチームでは受けることができないトップレベルの指導に多くの少年少女が感嘆し、熱心に取り組んでいた。

3-5 事業まとめ

地域連携強化を目指した本事業は、多摩キャンパスにおいて当初予定していたテニスやバドミントンのスポーツ研究センター協力によるトップレベルの指導を実施することができなかった。しかし小金井キャンパスにおける取組は、小金井地域において高齢者と大学という新たなつながりを創出することに成功しており、また市ヶ谷キャンパスでは一般企業とのスポーツを通じた連携というこれまでにない取組みを実現した。人的・費用的な負担が大きくなるため、新事業に取り組むことは決して容易ではないが、本事業で実施した取組みは本学の地域連携事業において大きなマイルストーンとなり、今後の連携強化の一助となることは間違いないと考えられる。

4. 社会人向け履修証明プログラム「健康とスポーツ」の開設

4-1 事業概要・実施スケジュール

本学が、積極的な社会人学び直しを目的として2019年度春に開設することを発表している履修証明プログラム「健康とスポーツ」。本事業では、プログラム実施に関わる先行シンポジウム及び各種手続きについて実施した。実施スケジュールについては以下の通りである。

実施内容	実施期間
受講可能科目選定	2018年10月～
履修証明プログラム開設記念シンポジウム	2018年12月9日
募集要項 WEB 公開	2018年12月25日
募集期間	2019年2月18日～3月15日
審査期間	2019年2月25日～3月18日
受講決定通知	2019年3月20日
プログラム開始	2019年4月7日（予定）

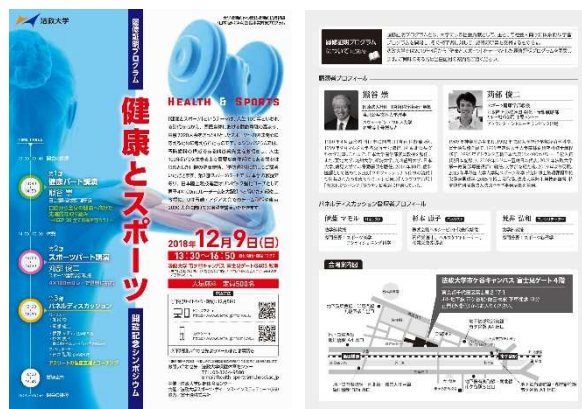
4-2 プログラム科目の選定の実施

本プログラムは、事業1で前述したアスリート向けに開講されている教育プログラムである「スポーツ・サイエンス・インスティテュート（SSI）」のカリキュラムをベースにしており、その中から受講者が希望する科目を履修することで、履修証明書を発行するプログラムである。そのため本プログラムの開設にあたって、まずSSIに設置する科目のうち、履修証明プログラム生が受講可能な科目の選定する作業を、SSI 運営委員会執行部と共に2018年10月頃より行った。

4-3 開設記念シンポジウムの実施

プログラム開設の目途が立った12月、プログラムの外部告知の意味も含めて開設記念シンポジウムを開催した。

イベントは3部構成で実施した。第1部に予防歯科の世界的権威である日吉歯科診療所の熊谷崇理事長を招いての講演、第2部では本学教員であり、本学出身のオリンピックでもあり日本を代表するアスリートの荻部俊二教授の講演、そして第3部は先述の2名に加えて本学体育会の活動をサポートする教授および非常勤



講師を含めた5名によるパネルディスカッションを実施した。

イベントに先立ち、第3部のファシリテーターを務める本学文学部教授でありSSI運営委員会副委員長である荒井弘和教授より、履修証明プログラムの詳細に関して説明がなされた。続いて本学におけるAD局にあたる保健体育センターのセンター長である徳安 彰社会学部教授より、なぜ本学がスポーツを題材としたプログラムを設置したか、長年の本学とスポーツとの関係性から解説が行われた。



第1部の熊谷医師の講演では、厚生労働省が掲げている8020運動で満足することなく、生涯を通じて28本の歯を持続させることこそが歯科医療人の使命であり、熊谷医師がどのような取り組みをしているのかの紹介がなされた。具体的には従来の歯科医療において実施していた発症後の事後診療では健康な口腔の維持は困難であり、日頃のメンテナンスに基づく予防医療においてのみ永久歯の維持を達成できるとの内容であった。熊谷医師はその目的達成のために個人の活動に頼らず、企業による従業員の予防歯科活動推進を目指す「SAKATAモデル」を提唱している。また口腔は全身疾患にもつながっているとの事実から、スポーツにおける口腔の重要性についても触れ、日本のアスリートの口腔事情が改善されればより競技成績の向上にもつながるとの考えも披露された。



第2部の荻部教授の講演では、教授が日本陸上競技連盟において担当している4×100mリレー種目について、リオオリンピック及びアジア大会で大躍進に至るまでの経緯が発表された。具体的には現日本リレーチームの代名詞となりつつあるアンダーハンドパスについて、これは新たに考案されたものではなく旧来の手法であり、採用に至った経緯は日本陸上競技連盟の科学的分析による研究の成果であるということであった。冷静に分析を重ね、現在の主流ではなく、旧来の手法が日本に合っているという結論にたどり着き、その結果、活躍に至ったことを鑑みると、肉体的には欧米諸国に劣る日本人が世界と渡り合っていくには、科学的手法の導入が一つの答えであるという内容であり、本学が実践している法政スポーツ強化プロジェクトにもつながる内容であった。



第3部のパネルディスカッションでは、本学自転車競技部部長である荒井教授をファシリテーターとして特に最近話



題に上るスポーツ業界における不祥事について、様々な立場の登壇者からの意見を求めた。特にスポーツは専門外である熊谷医師が述べられた、不祥事の根源は日本の上意下達の文化にあるという意見については、スポーツ業界の当事者である他の登壇者も大いに納得するものであった。

4-4 履修証明プログラム応募の開始

シンポジウム実施後、2月18日の募集開始にむけてプログラムの広報を本格的に開始した。本学WEBサイトをはじめ、本学校友会が運営しており本学のスポーツ関連情報の発信に特化した「法政スポーツインフォメーション」、本プログラムを実施する市ヶ谷キャンパスがある千代田区の商工連合会が運営する「千代田区商工連合イベントナビ」にて募集要項を公開した。また市ヶ谷キャンパスにおいて2月23-24日開催の、多くのOB・OGが参加した「55・58フェアウェルDays」や、通信教育部の冬季スクーリングにおいて募集要項を配布し、どちらも用意していた分量の全てを捌き、大きな広報効果を得ることができたと考えている。

4-5 応募結果

こうした広報活動の結果、初年度のプログラム受講生としては3名の社会人が受講する運びとなった。受講生の境遇はそれぞれ異なっており、診療所の運営にあたってコンディショニング科学の知見について学びたい学生、自身が経営するスポーツショップの安定した経営を目指しスポーツマーケティング論を学びたい学生など多様であった。

4-6 事業まとめ

シンポジウム及びプログラム開始までの過程を受け、スポーツ分野という書籍やビジネススクール等では学ぶ場が多くない分野において、高等教育機関の知見を公開することに対して、少なくない需要があることが分かった。本事業が社会貢献としての価値が十分にあることが分かったので、初年度は一部科目のみの公開であるが需要に応じて次年度以降は履修科目の範囲を拡大して実施していくことを検討していく。

5・多摩トレーニング施設を利用した学生スポーツ環境の整備

5-1 事業概要

本事業ではこれまで学生アスリートのトレーニングの場において、各部に依存していた安全面・健康面の管理を、大学として整備することを目的として、2018年10月よりアスレティックトレーナーおよび鍼灸師、あんまマッサージ師の資格者を多摩キャンパスのトレーニングルームに週2日配



置した（本学スポーツ健康学部卒業生）。これまでは少々の痛みや不調は、練習や我慢が優先され、怪我やパフォーマンスの低下につながる事例が少なくなかった。そこで、練習の前や合間に、気軽に相談ができるよう、トレーニングルーム内のケアルーム（トレーナー室）にその環境を用意することによって、学生（選手）が痛みや不調を後回しにしない土台づくりを目指した。

5-2 実施結果について

1) 処置の実施状況（被処置者別）

■2018年10-2019年2月トレーナールーム処置報告

学年	1	2	3	4	M1	M2	OB
人数	75	56	33	38	1	1	20

処置目的	cond	recond	Check	acute
件数	117	115	30	2

cond…マッサージ希望や試合練習前/後の調整など、明確な主訴の無いもの

recond…アスリハや局所テーピング対応や外傷障害に対する施術，局所部位の明らかな主訴のあるもの

check…評価・確認のみ

acute…外傷・障害に対する急性期の対応

この環境を提供した5カ月間で延べ224名（処置件数273件，P28に掲載している個別台帳を参照）がケアルームに訪れた。トレーナーの支援は、事業2において触れている「法政スポーツ強化プロジェクト」の対象クラブである陸上競技部を中心に行ったが、徐々にその実績が伝わり、他の部からの相談も増えていく状況になった。これは、練習の合間に手軽に相談ができること、練習拠点であるグラウンドの中心に位置する体育館内にトレーニングルームがあることが大きな要因と考えられる。

特筆すべきは、低学年（1,2年生）の来訪者が多いことだった。今回は10月～2月における5ヶ月間の短いデー

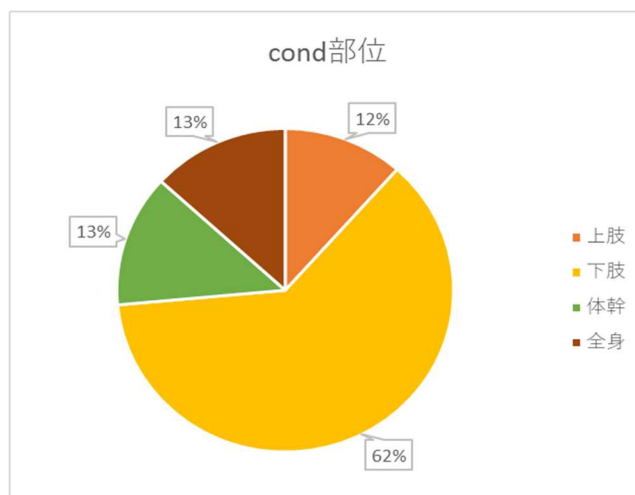
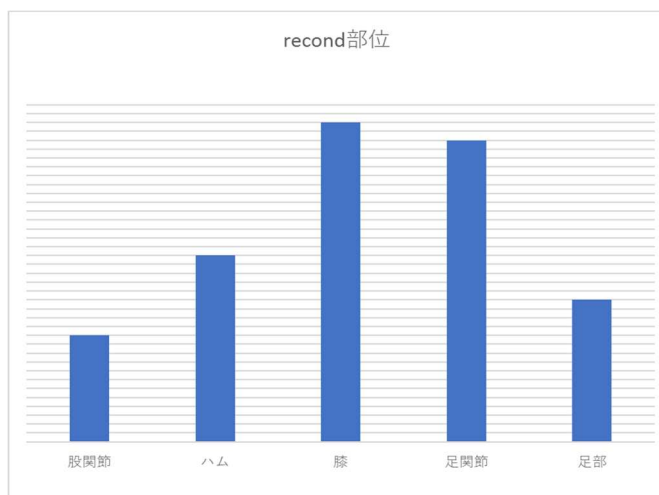
タのため必ずしも正確なデータとは言えないが、見過ごせない結果を得ることができた。高校を卒業して、一気に身体の高さや技術もレベルが上がる中で、練習や試合の疲労等が低学年（1,2年生）に多く出ているのではないかと懸念を示す結果となった。

一方で上級生（3,4年生）になると、その数は約半分になることから、一概に上記の推測は間違いではないと考えられる。いずれにせよ、不調を訴える場所が身近にあるという環境の整備に対して、一定の成果は出せたと思われる。



処置目的としては、明確な主訴の無いもの、局所部位の明らかな主訴のあるものがほぼ同数であった。いずれも、疲労（場合によっては怪我の直前）の場合もあれば、怪我をした後の回復期による相談と様々である。怪我をさせない、怪我を悪化させないという意味では、定期的な確認を行うことは重要であり、その環境を提供する必要性を証明できた。

2) 処置の実施状況（部位別）



recond（アスリハや局所テーピング対応や外傷障害に対する施術，局所部位の明らかな主訴のあるもの）において、相談の多かった部位は、膝・足関節・ハムストリングス・足部・股関節（左図）となった。

また cond（マッサージ希望や試合練習前/後の調整など，明確な主訴の無いもの）においても，下肢への相談が多かった。（右図）主たる要因としては，陸上競技部を中心に始めた環境提供であったことから，下肢に相談が集中した結果になったとも考えられる。

5-3 事業まとめ

今後は年間を通じてデータをとった際、相談者の学年の違いは出るのか、相談部位の違いは出るのかについて改めて確認をする必要がある。それによっては、学年に応じた指導や時期に応じた対応を取ることができると考えられる。将来的には、指導者にこのデータを提供することにより、トレーニングの一助にする可能性がある。そのためにもデータを蓄積することが重要である。

また、支援する部を増やすことにより、異なるデータを収集できるとも予測できる。ただし相談を聞き、状況把握をしたうえで、トレーニング指導等を行うため、一人当たりそれなりの時間を要する。今後、より多くの部、より多くの学生に使用してもらうためにはシステムティックな運用を検討しなければならない。

事業5 参考資料

日付	学年	所属	検査目的	部位①	部位②	部位③	評価傷害名①	評価傷害名②
2018/10/2	4	陸上	recond	右股関節			右鼠蹊部痛症候群	
2018/10/2	08	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/2	3	陸上	cond	体幹			CON	
2018/10/2	1	陸上	recond	左足部			左足底筋膜炎	
2018/10/7	1	陸上	recond	右足関節			右足関節捻挫 (ATF - PF)	
2018/10/7	2	陸上	recond	右ハム			右ハムストリングス損傷	
2018/10/7	08	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/7	08	陸上	acute+recond	右ハム			右大腿二頭筋 (長頭) 筋群損傷	
2018/10/7	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/9	4	陸上	recond	右股関節			右鼠蹊部痛症候群	
2018/10/9	08	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/9	2	陸上	cond	上肢			CON	
2018/10/9	1	陸上	recond	左股関節			左鼠蹊部痛症候群	
2018/10/14	2	準硬	recond	頸部			慢達え	
2018/10/14	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/14	1	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/14	2	陸上	recond	右ハム			右内側ハムストリングス損傷	
2018/10/16	2	陸上	cond	全身			CON	
2018/10/16	08	陸上	cond/recond	上肢	右下腿		CON	右アキレス腱断裂
2018/10/16	2	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/16	1	陸上	recond	左股関節			左鼠蹊部痛症候群	
2018/10/16	3	陸上	cond	体幹			CON	
2018/10/16	2	陸上	cond	下肢	体幹		CON	CON
2018/10/16	1	陸上	recond	右足関節			右足関節捻挫 (ATF - PF II 変換傷)	
2018/10/21	2	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/21	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/21	3	陸上	check/cond	左足部	下肢		左第二中足骨骨折炎 (軽度)	CON
2018/10/23	2	陸上	cond	上肢			CON	
2018/10/23	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/23	3	陸上	cond	体幹	下肢		CON	CON
2018/10/23	1	陸上	check/recond	左膝			左膝打撲傷 (左PF損傷疑い)	
2018/10/23	3	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/23	2	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/28	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/28	2	陸上	cond	上肢			CON	
2018/10/30	M2	陸上	check/recond	頸部			頸部捻挫 (慢達え)	
2018/10/30	4	一般	cond	上肢			CON	
2018/10/30	3	陸上	cond	全身			CON	
2018/10/30	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/10/30	2	陸上	cond	下肢			CON	
2018/11/4	08	陸上	cond	体幹			CON	
2018/11/4	1	ラグビ	recond	頸部			頸椎捻挫	
2018/11/6	1	ラグビ	recond	頸部	下肢		頸椎捻挫	CON
2018/11/6	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/11/6	2	陸上	cond	全身			CON	
2018/11/6	1	陸上	cond	下肢			CON	
2018/11/6	3	陸上	recond	右足関節	右足部		右後脛骨筋膜炎	右足外脛骨障害
2018/11/11	2	陸上	cond	全身			CON	
2018/11/11	1	陸上	recond	左膝	右足関節		左膝半月板損傷疑い	右足関節捻挫
2018/11/11	3	陸上	cond	体幹			CON	
2018/11/11	4	一般	recond	左股関節			左鼠蹊部痛症候群	
2018/11/11	4	陸上	cond	下肢			CON	
2018/11/11	1	陸上	recond	左足部	左足関節		左足底筋膜炎	左足関節外側インピンジメント疑い
2018/11/13	1	ラグビ	recond/cond	左足部	下肢		左足部舟状骨骨折除去手術後	CON
2018/11/13	M1	陸上	check/recond	頸部			頸椎捻挫	
2018/11/13	3	陸上	recond	左膝			左膝半月板損傷疑い・前部膝窩炎疑い	
2018/11/13	2	陸上	cond	全身			CON	
2018/11/13	1	陸上	recond	左膝	右足関節		左膝打撲傷 (patella 下関節内血腫)	右足関節捻挫
2018/11/13	3	陸上	cond	体幹			CON	
2018/11/18	1	陸上	recond	左膝	右足関節		左膝半月板損傷疑い	右足関節捻挫
2018/11/18	2	陸上	cond	全身			CON	
2018/11/18	08	陸上	recond	右足部			右外反母趾障害 (足底筋膜炎)	
2018/11/18	2	陸上	cond	下肢			CON	
2018/11/18	1	陸上	check/recond	左膝			左腸脛靭帯炎	

総評

法政大学が2018年度の「日本版NCAA創設委託事業」で謳った取り組み事業は、以下の5本である。

1. 学生アスリートのキャリア形成支援の強化
2. スポーツ科学の知見を導入した大学スポーツの強化
3. スポーツによる地域連携強化
4. 社会人向け履修証明プログラム「健康とスポーツ」の開設
5. 多摩トレーニング施設を利用した学生スポーツ環境の整備

いずれも、本学がスポーツに関して有するリソースをアスリートの支援に、あるいは社会貢献に結びようと構想したものである。具体的には、本学は学生アスリートを対象とした教育課程として「スポーツ・サイエンス・インスティテュート(S S I)」を持ち、教学組織としてスポーツ健康学部・同研究科を有している。また、各学部のスポーツ科学の研究者が集まる研究所として「スポーツ研究センター」を有している。

本委託事業は、こうしたスポーツに係るリソースを、2018年4月に発足した「保健体育センター」のもとで有機的に接続し、学生アスリートの支援強化や社会貢献の強化を実現しようとしたものである。

学内リソースと取り組み事業の関係を概説すると、S S Iのカリキュラム再編により、学生アスリートが自身のキャリアプランに沿って体系的に履修できる仕組みを作り上げ(上記1関連)、また、同カリキュラムを社会人向けに公開し、社会人が自身の問題意識に応じた学習の結果に対して大学が証明を発行できる仕組みを構築した(上記4関係)。多様な領域の学内のスポーツ科学研究者の知見と実績を、学生アスリートの強化に結び(上記2関連)、そしてこれを社会貢献にも繋げる(上記3関連)。また、学生が学部・研究科で修得した知識と技術を、学生アスリートの支援に繋げる仕組みを構築した(上記5関連)。

こうした取り組みを実現ならしめたのは、ひとえに本学におけるアスレチック・デパートメントとすべき保健体育センターが今年度に発足していたことと、スポーツ・アドミニストレーターの役割を、センター職員が担ったからであると言える。センター自身が発足間もないことから、学外の諸組織との連携不足や、アドミニストレーターである職員の経験が足りない部分もあり、まだまだ改善、開拓の余地を残すものであるが、まずは内部人材のレベルアップと活動の高度化により、NCAA創設事業の精神に適う活動を開始することができたと言えよう。今後はレベルアップした内部の人材が核となって、スポーツ・アドミニストレーター養成のプログラムを構築していくことも出来るものと考えている。スポーツ科学を専攻する学生や、履修証明プログラムで学ぶ社会人学生に養成プログラムを提供出来るようになるよう、今後検討を進めていきたい。

今後の取り組み課題としては、人材養成の検討と合わせて、今年度の事業に盛り込めなかった事項、例えば学生アスリートの学業と競技の両立の仕組みの確立、スポーツ指導者の研修体系の構築、中等教育課程スポーツとの連携に係る取り組みを進めて行くことが挙げられる。引き続き保健体育センターにおいて検討を進めて行く予定である。

以上